

# 神聖なる存在を呼び起こす ガーヤトリー・マン트라についての解説

30年以上にわたって、グルマーイはシッダ・ヨーギたちに、シッダ・ヨーガの伝統と文化の神聖な修行の数々に取り組む方法を教え続けています。それらの修行の一つは、ガーヤトリー・マントラの朗唱です。

インドのヴェーダの伝統では、ガーヤトリー・マントラは特定の神の存在を完全に呼び起こす強力な手段と見なされています。それらのマントラは、音の形の中にその神の完全な力を凝縮すると言われ、それゆえに変容の可能性に満たされています。それらは神の力に満たされているだけでなく、祈りとして組み立てられているため、意図にも満たされています。私たちはそれらのマントラを繰り返す実践を通して、鼓舞され、力づけられ、そしてその特定の神の神聖な資質を私たちの中に認識できることを祈ります。シッダ・ヨーガの道では、それらの神々は万物の中に浸透する唯一の神聖な大いなる意識のさまざまな側面であると理解されています。

伝統的なヴェーダの教典では、サンスクリット語のガーヤトリーという語は次のように定義されています。

*gāyantam trāyate iti gāyatrī*

それを朗唱する者を守るものがガーヤトリーである。

サンスクリット語のトラヤテーという語は、「自分自身を守る」という意味で、また「解放をもたらす」ことも表しています。よって、このようなマントラの朗唱は、マインドをその源、すなわち純粹

な大いなる意識に向かわせることで、マインドの本質についての実践者自身の制限された理解から彼らを守るのです。

ガーヤत्री・マントラは、幾つかの明確な特徴を共有しています。原初の音であるオームは、伝統的にガーヤत्री・マントラのそれぞれの繰り返しの前に付けます。マントラはまた、三つの主要な言葉を使い、それぞれの韻律の行の中に現れます。

*vidmahe*—「私たちが知って理解しますように」

*dhīmahi*—「私たちが内側にいますように」

*pracodayāt*—「それが私たちを鼓舞し勇気づけますように」

最も重要なガーヤत्री・マントラは、古代の教典、『リグ・ヴェーダ』の中に初めて現れる祈りです。そして、その他の神々にささげられる数々のガーヤत्री・マントラは、これから枝分かれした、あるいは触発されたと言われています。

*om bhūr bhuvah svah*

*tatsaviturvareṇyam*

*bhargo devasya dhīmahi*

*dhiyo yo nah pracodayāt*

オーム。おお、大地よ、空よ、そして天よ！

私たちが自分自身の内側に、神聖なサヴィトゥリ、太陽神の輝きを認識し、

そしてそれが私たちの洞察を目覚めさせますように。

——『リグ・ヴェーダ』(3.62.10)

「シュリー・アーディ・ガーヤत्री・マントラ」として——そして時には「スーリヤ・ガーヤत्री・マントラ」としても——知られるこのマントラは、ヴェーダのマントラの中で最も古く、最も力強いものと見なされています。この伝統の中でヴェーダマター、すなわち「すべてのヴェーダのマントラの母」、あるいは「すべての知識の母」として崇敬されているものです。それはまた、ブラーミンの少年が、ウパナヤナとして知られる伝統的な儀式の中で、ヴェーダの学習の手始めに受け取る伝授のマントラです。このマントラを受け取った後、生徒は「再生した」と言われます。彼のヴェーダの学びへの精神的な伝授が、彼の2度目の誕生なのです。

このガーヤत्री・マントラの重要性と秘めた力を認識して、賢人たちはインドで崇拝されているほとんどの神や女神のためにガーヤत्री・マントラを定めました。それらのマントラは、しばしば賢人たちの瞑想の深い境地の中で啓示されたものです。

「ガーヤत्री」はまた、「ガーヤत्री韻律」と呼ばれる詩の韻律の名称でもあります。これはヴェーダの正典の中に認められる主要な韻律の一つで、それぞれが8音節から成る3行を含んでいます。古代のヴェーダの伝統では、韻律(チャンダ)は大変重要であると考えられています。そしてヴェーダのマントラは特定の韻律で創作され、それを聴く者に確実な効果を与えると言われています。チャンダの語源は、「覆い、守る」と「喜ばせる、歓喜する」の両方を意味するチャドゥという語根に由来します。よって、その韻律は聴く者を守り、同様に、喜びを生むとされます。ガーヤत्री韻律についてこう言われています。「一つの8音節は、ガーヤत्रीの1行である。ガーヤत्रीは、強さでありブラフマンの輝きである。それによって人は、強さとブラフマンの輝きを獲得するのである」<sup>1</sup>

---

<sup>1</sup> Tāṇḍya Mahābrāhmaṇa XV. 1.8

ガーヤत्री・マン트라と韻律それ自体は、女神として擬人化されてもいます。神の創造力を体現するガーヤत्री・デーヴィーです。従って、幾つかのプラーナでは、彼女はしばしばシャクティ(力)や、宇宙の創造神であるブラフマー神の妻として表されています。よって、この特定の韻律は、それらのマントラの一つ一つを、シャクティ、あるいは大いなる意識の創造の光輝で満たすと言われ、それゆえマントラをとりわけ強力なものにしているのです。

「シュリー・アーディ・ガーヤत्री・マン트라」は、伝統的に毎日の祈り、特にサムデーヴァンダナと呼ばれる、夜明けと夕暮れにブラーミンたちが行う薄明の儀式の間のマントラの繰り返しのために、歌われたり使われたりします。またインドでは、ブラーミンたちがヴェーダの火の儀式の一部として、そして個人が寺院や家庭での集まりで、ガーヤत्री・マントラを歌うことも一般的です。

シッダ・ヨーガの道においては、グルマーイはお祝いや祝祭日の時に参加者がそれらのマントラの朗唱に取り組むように、ガーヤत्री・マントラの繰り返しを紹介してきました。それらのガーヤत्री・マントラは声に出さないマントラ・ジャパとして、特に瞑想に入る前に自分一人で実践することもできます。また、その朗唱を注意深く聴きながら瞑想する集中の対象にもすることができます。

ガーヤत्री・マントラを繰り返す時、私たちは神の姿としてのその神性を呼び起こします。そして私たちの内側にある、その神の神聖な特質と側面をたたえます。私たちは瞑想することで、この神聖な存在について知り、達成できるようにと、そして、いつもそのシャクティによって鼓舞され、導かれるようにと祈るのです。

